



〇〇中学校 第1学年

社 会 科 通 信

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.23

縄文時代の人々の寿命じゅんじゅうを考える

産むことも 生き延びることも 一大事だった

女性にとって出産しゅっさんは、いつの時代でも死の危険がともなう一大事である。時代が古くなればなるほど、その危険度は高まる。江戸時代でさえ、医学の力が乏しく、難産なんさんも多く、出産前後に命を落とす人が多かった^{*1}。まして、縄文時代では出産前後の女性の命が危険にさらされたことは想像に難くない。

また、古い時代には、産まれた子どもも、生き延びることは大変であった。江戸時代でも、出産の15パーセントくらいは死産で、無事に産まれても、5歳になるまでにおよそ4分の1が死んでしまった^{*2}。疱疹ほうそう(痘瘡)などの「はやり病」(疫病)で亡くなるが多かったからである^{*3}。

縄文時代では、幼い子どもは、風邪を引いて高熱を出しただけでも命を落としたかも知れない。今日のような安全な遊び場もない縄文時代では、自然界を遊び場にしていたと考えられるから幼児期から命の危険と背中合わせだったはずである。小さな事故で起こる怪我けがなどでも、幼い子どもたちは命を落としたと考えられる。たとえば、遊んでいて転んだだけで、傷から細菌が入って死ぬことだってあったであろう。

縄文時代の子どもの骨が発見されることがある。たとえば、大分県の立石貝塚で発掘された女性人骨こつばんの骨盤の中に、胎児の骨が残っていた。また、胎児から生後1年までの乳児を埋葬した埋め甕まいそう(うめがめ)も、全国で多数発見されている。

たとえば、三内丸山遺跡には、竪穴住居に近い北の谷の周辺に、大人の墓の6倍近い880基以上の埋め甕がある。早産、死産や新生児の死は、非常に身近なことであったと思われる。子どもたちの甕が、日頃生活している居住地の近くに埋葬されているのは、子を思う親の気持ちや、再生を祈ったことが現れていると考えられている。

さて、縄文時代の人々の平均寿命へいきんじゅみょうはどれくらいだったのだろうか。小林和正という研究者の研究結果がある。それによれば、縄文人骨235体の推定死亡年齢すいていしぼうねんれいをもとに、15歳時での平均余命へいきんよめいを求めると、男は16.1歳、女は16.3歳だったという。つまり、

*1 酒井シズ『絵で読む江戸の病と養生』講談社 2003年 p.59。

*2 岡村道雄『縄文の生活誌』講談社 2008年 pp.215-216。

*3 前掲、酒井シズ『絵で読む江戸の病と養生』p.58。

15歳まで生きた縄文人でも、男女とも平均30歳そこそこで亡くなったのである。

なお、縄文人の平均寿命（0歳児であと何年生きる）を求めないのは、子どもの骨はもろくて残りにくい^{ひかくてき}ために、比較的残りがよい15歳以上の人骨を分析の対象^{ぶんせき たいしやう}としているからである。だから、縄文人の平均寿命となるともっと短く、10歳代前半ぐらいではないかと推定されている。これは医学などが発達していない縄文時代では、乳幼児や病気、事故などによる死亡率が高かったからである。ただし、人類がサルから進化した時点で、すでに最大寿命は120歳ぐらいと決められているので、縄文人でも長寿^{ちやうじゆ}の人はいる⁴。

一方、乳幼児や子どもは、大人にくらべて少なくとも2倍から3倍は多く死亡していると考えられるが、彼らの遺体は保存されにくく、通常は大人の墓地にも埋葬されないため、若い縄文人の死の実態^{じったい}についてはほとんど不明である⁵。

ど ぐう なぞ 土偶は何を語るか 土偶は謎だらけ

日本各地の縄文遺跡から18,000点ほどの土偶が発見されている。今のところ、東日本での発見数が圧倒的に多い。発見場所は、不要になった物を捨てたと思われる盛り土、当時の住まいの片隅、集団が暮らしたと思われる地域の祭祀場やお墓などである。土偶の多くは、どちらかと言えば、丁寧に扱われずに無造作に捨てられたような形で発見される。

また、体の一部や全部が壊されている土偶が多く発見されている。それが何を意味するのも謎である。



バラバラにされた土偶



縄文のビナス 長野県茅野市縄文遺跡出土

土偶は何のために作られたのかは、研究者の間でも最大の疑問だとされている。今のところ、①安産、漁労、木の実の採集など食料確保の成功、②病気治癒、③生命の再生などを祈願した、と学説は分かれている。しかし、これら以外にも、様々な目的のために作られた可能性もあるという学説もある。当時の人々はさまざまな願いを土偶に託し、成就させるために土偶を作ったと考えるのが良いのかも知れない⁶。

*4 勅使河原彰『縄文時代史』新泉社 2016年 pp.302-303。

*5 前掲、岡村道雄『縄文の生活誌』講談社 2008年 p.216。

*6 武藤康弘監修 譽田亜紀子『はじめての土偶』世界文化社 2014年 p.27。